

ウェクスラー式知能検査本邦導入の背景：
品川不二郎・孝子へのインタビューから¹

鈴木朋子¹・鈴木聡志²・安齋順子³

Background of Development of Wechsler Intelligence Test in Japan

Tomoko SUZUKI¹, Satoshi SUZUKI², Junko ANZAI³

¹ 横浜国立大学 教育人間科学部

² 東京農業大学 教職・学術情報課程

³ 城西大学 現代政策学部

¹ Yokohama National University, College of Education and Human Sciences

² Tokyo University of Agriculture, Teacher Education and Scientific Information

³ Josai University, Faculty of Contemporary Policy Studies

はじめに

知能検査は、心理学における重大な「発明」とされている（佐藤・溝口、1997）。1905年、フランスのビネ（Binet, A.; 1857-1911）とシモン（Simon, T.; 1873-1961）が「心理学年報（L'Année psychologique）」に、「異常児の知的水準を診断するための新しい方法（Méthodes nouvelles pour le diagnostic du niveau intellectuel des anormaux）」を発表したのを嚆矢とする。その後、ビネ・シモン式知能検査は、各国で改訂され使用されるようになり、日本でも複数の改訂版が発表された。その経緯については、田中ビネーの歴史（中村・大川、2003）、鈴木ビネーの歴史（石川・高橋、2008）、久保良英によるビネ式知能検査の改訂（鈴木、2003）といった形でまとめられている。

さて、ビネ・シモン式知能検査以上に、現在よく使用されている知能検査は、ウェクスラー式知能検査である。ウェクスラー式知能検査は、アメリカのベルビュー病院で心理の室長として働いていたウェクスラー（Wechsler, D.; 1896-1981）が開発したもので、1939年に発表された Wechsler Bellevue Intelligence Scale が最初のものである（Reisman, 1976）。ビネ・シモン式知能検査が学習不振児を選別して適切な教育を与える目的で開発されたのに対して、ウェクスラー式知能検査は患者の診断を目的として開発された経緯を持つ。1946年に、Bellevue Form II として改訂された後、ウェクスラー式知能検査は対象によって検査が分けられ、成人を対象とした WAIS、児童を対象とした WISC、幼児を対象とした WPPSI が作られた。現代に至るまで、成人用の WAIS は 1955 年、1981 年、1997 年、2008 年に、児童用の WISC は 1949 年、1974 年、1991 年、2003 年、2014 年に、幼児用の WPPSI は 1963 年、1989 年、2002 年に改訂版が発表されている（Silva, 2008; Lichtenberger & Kaufman, 2012）。日本改訂版は、1950（昭和 25）年に南博・依田新が『知能診断テストの手引：ウェクスラー・ベルビ

¹本研究は、科学研究費補助金の助成を受け行ったものである（若手 B（22730535）「知能検査デジタルアーカイブ」の構築）。

ュー法改訂』を金子書房から出版したのが最初であろう。1954（昭和 29）年に児玉省と品川不二郎が『WISC 知能診断検査法』を、1958（昭和 33）年に児玉省・品川不二郎・印東太郎が『WAIS 成人知能診断検査法』を共に日本文化科学社から出版した。その後の日本改訂版は、日本文化科学社から継続して出版されている。

我々は、ウェクスラー式知能検査の WISC、WAIS、WAIS-R 日本改訂版の著者である心理学者品川不二郎と、夫人で教育評論家である品川孝子にインタビューする機会を得た。品川不二郎は、1916（大正 5）年に岡山県で誕生、1942（昭和 17）年に東京文理科大学教育学科心理を卒業、同大学の副手となったが、東亜研究所の嘱託としてジャワ島派遣調査団員に加わり、1946（昭和 21）年に復員帰国した。玉川大学助教授等を経て、1950（昭和 25）年から 1 年間、アメリカのミネソタ大学に留学し、1951（昭和 26）年に東京学芸大学助教授、後に教授に着任した。1962（昭和 37）年、「知能と Personality traits との構造的関連に関する研究」にて学位（文学博士）を取得（東京教育大学）。1980（昭和 55）年、東京学芸大学を定年退職後は洗足学園短期大学に勤務した（大泉、2003）。夫人である品川孝子は、1922（大正 11）年に新潟県で誕生し、1942（昭和 17）年、日本女子大学家政学部卒業後、東京文理科大学教育相談部に勤務した。1944（昭和 19）年、陸軍属としてジャワ島へ派遣され、ジャカルタ女子高等師範学校で教授を勤めた。1954（昭和 29）年、日本女子大学家政学部児童学科卒業後は、田中教育研究所教育相談部員、フリーの教育評論家、児童心理学者として活躍した人物である。他に、主婦の友社相談部教育相談員、大和学園聖セシリア女子短期大学教授を経験した（大泉、2003）

インタビューは、知能検査開発者へのオーラルヒストリーの一環として行われたものだが、インタビューの話の流れを遮らずに聴くことを重視した。品川不二郎からは、別の日に臨床心理学について話を聴いた経緯があったため（鈴木・安齋・鈴木、2011）、インタビュアー、インタビュー双方が既知のこととして話を進めている部分もある。知能検査とは関連が薄いインドネシアの話や個人的な話も多く含まれているが、当時の日本の社会や学界の様子を伝える貴重な資料になると考え、省略せず掲載する。トランスクリプトは、品川不二郎・孝子両者の校閲を経たものである。人物名の尊称は論文の慣例に従って省き、「ジャワ」等の呼称は当時の表記を尊重した。

品川不二郎・品川孝子へのインタビュー

インタビュー日程：2010 年 6 月 15 日

場所：カルムコート武蔵野 応接室

インタビュアー：鈴木朋子、鈴木聡志、安齋順子

品川不二郎と心理学の出会い

—品川不二郎先生は、東京文理科大で田中寛一²先生の下で学ばれたのですね。

² 田中寛一（1882-1962）1907（明治 40）年、東京高等師範学校英語科卒業。1913（大正 2）年、京都帝国大学文科大学哲学科心理学専攻卒業、東京帝国大学大学院に進学、東京高等師範学校講師、1919（大正 8）年同教授。海軍技術研究所実験心理調査室顧問、東京帝国大学航空心理研究所嘱託等を経て、1922（大正 11）年、文部省在外研究員として欧米留学。1929（昭和 4）年、東京文理科大学教授。1945（昭和 20）年、同大学を定年退職、日本大学教授。1947（昭和 22）年、

不二郎：直弟子です。

一田中先生とお会いになったきっかけを伺ってもよろしいでしょうか。

不二郎：田中先生は、朝日新聞第一面のトップに、子どもの事例を、相談の結果みたいなのを、それはいつごろかわからないくらい昔から、ケースを出しておられました。そういう点でも、戦前も戦前、私が子どもの頃から、田中先生の名前を（知っていました）。

一子どもの頃から。

不二郎：ええ。というのは、田中先生の奥さんと、私の母親とは女学校の時の同窓生で。岡山の山陽学院³の寮で、田中先生の奥さんが1、2年先輩で、私の母が2、3年後輩で。田中先生の奥様と、私の母はよくお話をしていました。私は、4年生の時に父親が（事故で）死んでます。だから、父親のない貧乏な成育歴を、私は持っていて、学生になっても家庭教師のアルバイトに行ったり、働きながら、勉強しました。でも、バレーボールの選手もやったりして、あまり勉強ばかりは一生懸命にやってはいなかったんです。私の父親は、私の母と結婚を許されず、（実家を）出ちゃったので、学歴がないんです。その代わり、岡山県庁へ行って、「私を自由になんでも検査して、私の資格を認定してくれ」って、言ったんです。そしたら、「お前は大変成績がいいから」って、35歳で倉敷の小学校の校長にさせられたそうです。それを機にいろいろと、私が口で言うのはおかしいんですが、やり手だったらしくて、現在も小学校に行きますと、私の父親の記念碑が、校庭の隅に立っているんです。

「この学校の運営のために、大変尽力、特別な尽力をした」ということで石の記念碑が。その後に郷里に帰って、徳山小学校の校長になって、市や県の偉い人と出かけて、列車で衝突して、全部即死で、大変世間で騒がれました。そんなことがあって、父が早く亡くなりましたので、私の母は勉強して、女学校の教師の免許を取って、女学校の教師をずっとやっておりました。

一お母様も女学校の教師をされていた。

不二郎：はい。近所に文華女子というのがあるんですが、その前身が東京に出てきて勤めた河口愛子⁴という有名な女史が作った学校で、小石川高等女学校で女学校の教師をしていたんです。その女学校の名前が変わって、今は文華女子高等学校になっておりますが、あれは私の母が勤めていた学校なんです。

一教育や心理学に、小さい頃から親しんで育つような環境だったのですね。

不二郎：そうですね。田中先生の名前は子どもの頃から知ってましたから。田中先生の門下に入れれば、とても、私としては嬉しかったわけです。

不二郎：（東京文理科大学を）卒業して、研究して、助手に採用されました。副手に。

一文理科大学で同期だった方は。

不二郎：長島貞夫⁵が高等師範の英語科で（同期だった）。私、高等師範の英語科で4年やって、それ

玉川大学学長。専門は、人間工学、教育心理学、教育測定、知能検査。（大泉、2003）

³ 現在の「山陽学園（山陽女子中学校・高等学校）」（学校法人山陽学園、2015）。

⁴ 河口愛子（1871-1959）女学校を卒業し、京都高等女学校の教師となった後に上京。女性教育の必要性・女性の社会的地位の向上の必要性を訴え、1913（大正2）年家事裁縫研究所を設立、1923（大正12）年、小石川高等女学校（1948年に文華女子高校と改称）を設立、校長となる（芳賀、1993）。

⁵ 長島貞夫（1917-1988）1940（昭和15）年、東京高等師範学校文科第三部（英語科）卒業、1942（昭和17）年、東京文理科大学教育学科心理学専攻卒業、同大学の福手。1947（昭和22）年、

から文理科大学の心理を受けたんです。田中先生のごことは、私は子どもの頃から承知していて、尊敬しておりましたから、田中先生の研究室に入れていただいたのは、まったく喜んで、嬉しくて。そのとき、鈴木⁶先生が私の上の助手をしていらして。

—文理科大学は何年間通われたのですか。

不二郎：戦争になりまして、半年短縮になりましたから、だから、正味3年（で卒業しました）。

田中B式インドネシア版の開発

—文理科大学を卒業された後、副手をされて、身分はそのままで、東亜研究所の嘱託としてジャワ島に行かれたんですね。

不二郎：東亜研究所⁷というのは、軍と政府と、それから全国の組織がありまして、そこが作った研究所で、いわば国の研究所なんです。全国的な学者を総動員して、占領した南方へ研究者が必要だ、資料がなきゃ政治ができませんから。それで、東亜研究所ができたんです。私の先輩がそこにいまして、よく考えてみたら心理学関係をやっている人が1人もいないっていうので、それじゃいけないというので、その人が田中先生のところへ訪ねてこられて、「心理学をやった人が1人欲しいんだ」、「誰か1人希望者を探してください」と頼みに来られたんです。それで、田中先生が私に、「こういう話があるが、ジャワへ行く気はあるか」と。行く気はあるかないかの騒ぎじゃない。もう行きたくて行きたくていたんですから、もう、これ幸いと、すぐ行くことになったんです。

不二郎：私の家内は、その東京文理科大学の教育相談部に、2年間ほど勤めてるんです。それで、偶然にジャワに行ったんです。

—では、日本からジャワに行った心理学者は、品川先生と孝子先生と2人だけですか。

不二郎：心理学ではそうですね。

—品川先生は26歳でジャワ島に行かれたんですね。

不二郎：そうです。

—孝子先生はもっと若くていらした。

孝子：ええそうですよ。だから止められました。日銀で。お金を出して下さらないの。

—日銀で止められたんですか？ ご両親ではなくて。

孝子：違うの。向こうに行くためには、軍票っていう軍のお札を持っていくの。あれは、インドネシアのリラですね。その軍票をもらって、勤務地に合わせて、もらっていくわけです。ところが、日銀では、その担当者の方が私を見て、「99.9%死ぬんだから、行っちゃいかん」って言うんです。「なん

東京高等師範学校助教授、後に同学校教授。1951（昭和26）年、東京教育大学教育学部心理学科助教授、後に同大学教授。専門は、教育心理学、性格形成、自我の心理。（大泉、2003）

⁶ 鈴木清（1906-1982）1931（昭和6）年、東京高等師範学校文科卒業、1936（昭和11）年、東京文理科大学教育学部心理学専攻卒業、東京府立第一高等女学校高等科教授。1939（昭和14）年、東京文理科大学助手、東京高等師範学校助教授兼務。1946（昭和21）年、玉川大学教授。横浜国立大学教授を経て1955（昭和30）年、東京教育大学体育学部教授、定年退職後は東京女子体育大学学長。他に（財）田中教育研究所所長。専門は教育心理学、教育評価、体育心理。（大泉、2003）

⁷ 東亜研究所は、1938（昭和13）年企画院のもとに設けられた日本の国策のための調査機関。中国、ソ連、中近東、南方などアジア全域を調査対象とし、調査テーマは自然科学、社会、経済、政治と多岐にわたり、外部委嘱調査も盛んだった。1945（昭和20）年に解散した。（下中、1985）。

て親だろう」って親（に対して）まで怒ってました（笑）。

不二郎：私は、ジャワへ行って、（孝子が）田中先生の紹介状を持って来たので、知り合いになったわけです。

孝子：面白いですよ。私がジャワへ行くときに田中寛一先生が5通紹介状を書いてくださって、そのうちの4通は、既婚者でした。1通だけが未婚者で、それがこの男（不二郎）です。

—（笑）

不二郎：まあ、本当にね、当時は、無事にまずシンガポールにまで行けるかどうか。もう門司を出たらずーっとシンガポールまで、魚雷攻撃を受けて、本当に死ぬはずだったんですよ。

孝子：99.9%死ぬんですね。目の前で二千人の若者が死んで行くのを見ていました。その船は2つになって、スーッと沈んで行きました。それが一生でてきますね。忘れることができません。そこに乗っていた、15歳、16歳の少年たちは、親御さんがみんな大事に可愛がって育てたわけでしょう。

不二郎：私が乗った船は、航空母艦を作る途中の船で。ところが、撃たれちゃったんです。それで、船の後ろの方が壊れて、それでも、シンガポールまで10日で行きました。すごいスピードで。だけど、目の前で、魚雷が潜水艦に発射するんですよ。魚雷ってのは浮いてくるんです。シュッシュッシュッと、私どもが行くところにぶつかるように出すんです。普通はそれで撃沈されちゃうんです。ところが、船の方もちゃんと早く見つけて、こうやって90度角度を変えたんです。魚雷を避けるために、急カーブ取ると船がこうなっちゃう。それでも命助かって。シンガポールに辿りついて。

不二郎：私たちは60人の調査団として行きました。それぞれの分野の専門家60人、60の分野の専門家を派遣したんです。東南アジアの、シンガポール、ジャワ、ビルマ、フィリピン、5つの地方に調査団を派遣したんです。まとまって住宅ももらい、まとまって最後まで仕事をしました。

—『新ジャワ』に、品川先生の「インドネシア人の智能」⁸という論文が掲載されていますが。

不二郎：朝日新聞社がインドネシアに行ってたんです。それでジャワ新聞っていう名前を付けて、雑誌を作っていたんです。私は知能検査を沢山やったのですが、「その結果を載せたいから、原稿書いてくれ」って言われて、載せたのがこれですね。田中寛一先生の書かれた本を持って行ったんです。

『教育統計』みたいな本で、統計の取り方がよくわかって。向こうでやった検査の結果を田中先生に習った方法で処理して。新聞社の社長がちょうど先輩だったんです。それで、「君そんないいネタを持って、ほっとくのはもったいない。すぐその雑誌に原稿書きなさい」って、副社長の命令で原稿書かされた。それが『新ジャワ』という雑誌に全部載りました。

—田中B式⁹を使って、ジャワで検査をされたんでしょうか。

不二郎：そうです。

—田中B式は文理科大学の時に、田中先生から習われたんですか。

不二郎：そうですよ。田中先生が作られた検査です。

—被検者数を見たら3千人以上、ジャワで検査を実施しているようですが。

不二郎：そうです。やりました。300人の人を使って。

—それは、ジャワで、テスターを教育なさったんですか。

⁸ 品川不二郎（1944）『インドネシア人の智能』、新ジャワ、1(3), pp.37-45

⁹ 田中寛一著（1935）『B式知能検査法指針』 藤井書店のこと。アーミーβ検査をもとに田中が作成した非言語性の知能検査である。なおA式は、アーミーα検査をもとにした言語性の知能検査である。

不二郎：説明が足りなかったんですが、オランダ時代に、オランダは貿易を盛んにやって儲けたんです。それで、貿易のための研究所が出来て、そこは広い建物で3千人が働いてた。統計の機械も最新のもので、その場所を使って、人もいますし、親分になる弟子を1人作って。その人はスマトラの人で、オランダに留学したりしているインテリです。

孝子：ハイクラスで、頭のいいのを全部、オランダへやって、帰ってきて、オランダ人の代わりに、色々な、政治、経済、一切をやっていたんです。

不二郎：その弟子を1人抱えて、その弟子が30人の計算係を（指揮）して。だから私自身は計算はやりません。みんな彼に任せておくと、彼の部下が全部やってくれる。私は彼を可愛がって、出張するときはいつも彼を連れてったんです。（オランダに留学した）彼らは、オランダ語、英語、それから、日本人がいたら日本語、ドイツ語の4つの言葉を話せました。

—先生が田中B式をジャワに持って行かれたんですね。

不二郎：ジャワで印刷したんです。マレー版。日本語でしたら彼ら読めませんでしょ。A式はできないんです。言葉があるから。残念ながらB式だけ。B式だったら言葉はいりませんでしょ。それで、マレー語版のB式を私が作ったんです。2年かかりました。まず統計取って、そのために検査に行かなきゃいけないでしょ。

—『新ジャワ』に載っている論文が、ジャワ人統計に使ったマレー版の田中B式ですね。

不二郎：そうです。私が作った。中身は同じですけどね。

—テストは、子どもたちをいっぺんに集めて検査をしたんですか。

不二郎：いやいやいや。すごく、長いことかかって、やって、検査して歩いたんです。その検査は私の弟子が。私は言葉ができませんから。

田中寛一の元で学んだ知能検査について

—話は戻りますが、文理科大学で田中先生の所にいた時に、知能検査は何を学ばれましたか。田中B式とA式と他の何か学ばれた知能検査はあったのでしょうか。

不二郎：ビネーを。

—田中ビネー。その3つでしょうか。

不二郎：そうですね。学ぶというよりも、先生の研究室のところには、田中先生のテストをする部屋が、ずーっと長く、向こうのつきあたりまであったんです。そこで沢山の人が来て、主としてビネー法が多かったですね。田中ビネー。それから、集団テストは簡単ですから。みんな、次から次へと希望者が来まして、全国からやってきて。絶えずそこで検査やってて、家内なんか2年間そこで、ビネー法とか、いろんなテストをやったんです。

—田中先生の、田中ビネー式知能検査は、1947年、昭和22年の発表ですよ。となると、品川先生はB式を習われたんでしょうかね。田中B式は1935年、昭和10年に発表されているみたいですから。

孝子：B式ですね。

—B式ですか。

孝子：東南アジアの、こちらの方の資料はなかったんです。

不二郎：私は昭和12年に文理大に入りました。私の先輩たちがそうやって、大集団を作って、検査

して、東南アジアから、北アメリカから、インドネシアの方から資料集めて歩いたんです。苦労だったらしいですよ。

一品川先生先輩方で田中研究室にいた人たちは、アジアに散らばって、色々なところでデータを収集して。そういう仕事を先生も見ていらして、アジアに行きたいと思っていらしたんですか。

不二郎：いやいやいや。私はもっと後輩で、私は先輩、小見山さん¹⁰とか、後藤岩男さん¹¹とか、そういう私より1、2年先輩の人たちがテストをして、私はその後に入ったんです。

品川孝子と心理学の出会い

一品川孝子先生からもお話をうかがいたいと思います。1942（昭和12）年9月に日本女子大学校家政学部児童心理をご卒業された。

孝子：戦前ですから大学校で、要するに旧制の専門学校ですね、4年制の。4年制でしたけど戦争中でしたから、3年半ぐらいで9月に卒業しました。家政学部に入ったのですが、2年を過ぎると、専攻制に分かれまして、自分の好きな専門に進みます。私はそこで心理学に行ったんです。で、たまたま児玉先生¹²がいらっちゃって、大変面倒をよく見てくださいます、毎日児玉先生のお家に行っておりました。奥様が私を可愛がって、何もない時代に夜食を作ってくださいました。お夜食いただいて、先生が遅くまで、愛情のある指導をしてくださって。夜遅く寮まで送ってきて、寮の門番に「確かに届けましたよ」って言って、先生が挨拶をして。で、私は寮へ帰って行きました。

一児玉先生から学ばれたときに、孝子先生と同期の方はいらっしゃったんでしょうか。

孝子：私の同期で心理学を一生懸命やってた人は、いなかったように思います。児玉先生は毎日図書館で夜に勉強してらして、アメリカの原書をお持ちになって、バラバラバラバラってそれをめくりながら、講義をしてくださいましたね。私は心理専攻生として卒業しました。でも、やたらに色んな講義を聞いて歩きました。

一孝子先生は、日本女子大学校を卒業なさった後に、東京文理科大学教育相談部に2年間勤務なさったのですね。

孝子：2年は。というのは、もう私、外地教育要員として行くという試験を受けてました。

一（ジャワは）試験で行くような形だったんですか。

孝子：一番若かったんです。だから、繰り上げ卒業。半年早く出て。

¹⁰ 小見山栄一（1913-1963）1934（昭和9）年、東京高等師範学校文科卒、1939（昭和14）年、東京文理科大学教育学科心理学専攻を卒業、研究科へ進学。東京文理科大学心理学研究室福手、台北帝国大学文政学部福手等を経て、1952（昭和27）年、東京教育大学助教授、1963（昭和38）年、同大学教授。専門は教育心理学、教育測定の研究。（大泉、2003）

¹¹ 後藤岩男（1904-1949）尋常小学校訓導として勤務後、1930（昭和5）年、東京高等師範学校文科第一部卒業、1933（昭和8）年、東京文理科大学教育学科心理学専攻を卒業。東京高等師範学校助手等を経て、1939（昭和14）年、東京文理科大学助手兼東京高等師範学校助教授、1949（昭和24）年、東京教育大学教授、在職のまま逝去。専門はゲシュタルト心理学、児童観察法、障害児心理学。（大泉、2003）

¹² 児玉省^{はぶく}（1896-1988）東京外語専門学校英語科を卒業後、大阪毎日新聞記者を経て、1925（大正14）年、シカゴ大学哲学科卒業、大学院心理学専攻へ進学。1929（昭和4）年、慶應義塾大学予科教授及び慶應義塾大学講師。1937（昭和12）年、日本女子大学講師、1948（昭和23）年、日本女子大学家政学部教授、後に児玉教育研究所を主宰。専門は発達心理学、児童心理学、知能検査・職業興味検査などの翻案標準化。（大泉、2003）

品川孝子と教育相談

—東京文理科大学の教育相談部には、心理学の訓練で入られたんですか？

孝子：そうじゃなくって、たまたまそこが空いていたから。体育の測定をした平沼先生¹³に、私の女学校の体育の先生が使われて、子どもの体位の測定をしました。それで平沼先生のところへ紹介されました。

—それで、平沼先生のご紹介で、教育相談部に入られたんですね。

孝子：で、「ちょっとおいで」って言われて、「あそこにでもいたらいいよ」って。誰も何にも言わない。そういう人がうろうろいましたよ。ほかにも。

—孝子先生は教育相談部でどんなお仕事をなさってたんでしょうか。

孝子：実際に子どもを扱いましたよ。最初に扱った子ども、今でもよく覚えてます。それはね、子どもが3人兄弟でやってくるんです。その子たちは(挨拶をせず)いきなり人を殴るんです。3人とも。で、何にも言わない。それでこの「殴る子っていうのは一体どういう子だろう」と、その家へ行ってみました。そしたら、お父さんもお母さんも私が行った夕方の時間は、いません。で、私、ご飯を炊いたり色々料理して食べさせました。子どもたちが寝ちゃったら、お父さんとお母さん酔っぱらって帰ってきた。そして、いきなり喧嘩するんです。それが毎晩。子どもが目を覚まして見るときは、いつもお父さんとお母さん喧嘩なの。そこへずうっと通いましたね。そして、私黙ってご飯を作ってやりました。そしたらお父さんお母さん、変わってきました。それがやっぱり教育相談を試みようと思うきっかけでしたね。その人たち、いいお父さんお母さんになっていきましたよ。毎日、私がご飯を食べさせてるのを見て、帰ってくるようになったんです。それで、早く帰ってきたら酔っぱらってませんから、喧嘩にならない。子どもがいつも見るときは、お父さんお母さん大喧嘩。言葉なんかそっちのけです。もう、引っかいたり殴ったり、だから子供は、人と会った時のご挨拶っていうのは、殴ったり引っかいたり。「おはよう」「こんにちは」ないんですよ。「どうしてだろう」。それがやっぱり教育相談っていうものをやってみる面白さでしたね。そんな人に会ったから。

—教育相談では、相談者が来るのを待ってただけじゃなくって、先生が家庭まで出向いて。

孝子：ええ。学生でしたからね。その後、教育相談をするチャンスが色々ありました。私はよく「お母さんが来ない」っていうと、「どうして来ないの」って。「内職してて来られない」。「内職して、今日お昼のコッペパンを買うんだから」。私はコッペパンを買って、「コッペパン持ってるから、おいで」って言うんです。それで、お母さんに渡します。そしたら、所長さんに叱られました。「先生、そんなことしたら、もうコッペパン山ほど買わなきゃいけないよ。みんな内職しないで来るから」、「『あそこにいる先生、ただでコッペパンくれるよ』って、そうなっちゃうよ」って言われましたね。それは北区立の教育相談所。そこへNHKの人がやってきたんですね。

孝子：円地さん¹⁴って作家がいましたけどね。それをずーっと観察して、小説を書きました。そのシ

¹³ 平沼良（1899-）1933（昭和8）年に東京文理科大学教育学科教育学専攻卒業、横浜市児童研究所所員。1936（昭和11）年、東京高等師範学校助教授、1938（昭和13）年、ドイツのベルリン大学心理学科に留学、東京文理科大学教育相談部勤務を経て、1945（昭和20）年、東京高等師範学校助教授、1952（昭和27）年、東京教育大学専任講師。他に応用教育研究所理事、図書文化社長など。専門は教育心理学。（大泉、2003）

¹⁴ 円地文子（1905-1986）小説家。1922（大正11）年、日本女子大学校付属高等女学校を病弱の

ーンにそっくりなのが出てきて、北区の相談所が出てきます。

一孝子先生は、教育相談部で心理検査、知能検査は取られたことがあったのでしょうか。

孝子：それはテスターがいましたから。

一では、テスターが知能検査を取って、先生は相談を受けられたんですね。

孝子：ええ。テスターはいっぱいいます。だから、自分ですということ、あんまりありませんね。大抵親に話をしてるでしょ。子どもの方はテスターが検査してる。それで、その資料を後から使いましたね。

孝子：2年間勉強した後、私は、やっぱり心理を本気でやらなきゃと思ったんですけど、心理だけでは子ども全体をつかむことが難しい。それで、児童科へ行きました。先生に早く学校を出れば良いと言われて、学士入学で、新制大学の通信教育というのがあるんです。通信教育は1年間、スクーリングで1年間実際学校に通わなくっちゃいけない。それを1年間やって、レポートを2年分書いて、それで1年で卒業しました。それから私、講演を沢山しました。1年間にもうすごい講演をして、「忙しかったねえ」って数えたら、160何回してて。それで、反省しました。100回でやめようって。で、100回を続けました。私の話っていうのは、学者の話じゃないんですよ。学者になった覚えはない。

品川孝子のジャワ島における仕事

一孝子先生はジャワ島に陸軍所属として行かれたんですね。

孝子：行きました。日本語教育をする人を、軍が募集したんです。それで、男性も女性も沢山受かりました。で、何処に誰を回すか、後から軍で決めたんでしょうね。どうせ日本にいても大政翼賛会¹⁵、戦争賛成のグループがありました。私それに行きたくなかったの。ですから、外地に行こうと思った。それと私は、例えばですね、オランダがインドネシアを植民地にしてたでしょ。その植民地にしてるってことに対して、非常に抵抗がありました。そこを解放して、その人たちを教育することができたら、行ってみたいと思ったんです。で、最初、日本語教師というふうな募集でした。たださっきお話ししたように、インドネシアに派遣されるってということが決まったときに、これは軍で勝手に決めてるんですよ、それで、決まったときにですね、あの軍票というの、日本銀行へもらいに行くわけです。その担当者の方が、下さらない。「何も行くことはない。親の気がしれない。」そういつて言われて、何べんも言われて、とうとう最後は「もう知らないよ」て言って、もう叩きつけるように出されました。帰ってきてから、私は日銀の仕事をするんです。その時に、ご苦労さんですっていう会食がありました。こういう経験を私は日銀でかつてしたって言いましたら、すぐその人を調べてくれました。「『元気で帰ってこい、99.9%死ぬよ』」て言われたその方に、お礼を言いたい」と。2年前に亡くなってました。もっと早く言えば良かったです。そんな経験しましたね。

孝子：こっち（不二郎）が言う通りで、別に、こちらとは別に行ったわけですけど、もう2千人も乗

ため中退。『ひもじい月日』にて第6回女流文学賞を受賞、代表作の『女坂』では第10回野間文芸賞を受賞。『傷ある翼』他の三部作で第5回谷崎潤一郎賞を受賞。1960（昭和35）年に『円地文子訳源氏物語』にて文化勲章を受章。

¹⁵ 日中戦争および太平洋戦争期の官製国民統合団体。1940（昭和15）年に結成された。「大政翼賛の臣道実践」という観念的スローガンを掲げ、衆議は尽くすが最終決定は総裁が下すという、ナチスの指導者原理をまねた「衆議統裁」方式を運営原則とした。総裁は首相が兼任した。（小学館、2001）

ってる船が、もう一発で、魚雷一発であっても、スーッと海の中に引きずられるように行ってしまいました。訓練も何も受けてない少年たちは、ボートが甲板にいっぱいあったのに降ろせないんです。「縄を切れー」ってこっちから怒鳴っても、聞こえませんか。どうすることもできません。で、僚船って軍団を組んで行くわけですけど、みんなそうすると、巡洋艦だけ残してあとはみんな逃げちゃいますからね。何にもならないんですね。

孝子：それで、私がジャワでやった仕事ですが、面白いですね、戦争っていうのは。アメリカ人が来たら、学校の制度を全部アメリカ式にしたでしょ。日本の戦前の制度ではない。日本はインドネシアを占領したら、日本の制度を全部持ち込んだんです。私は、女子高等師範学校に勤めました。最後は、 Cotton の拳銃と青酸カリと持って歩いてました。だって、周りは共産分子が沢山いるところで、150 人の学生を守らなきゃいけませんでした。

ウェクスラー式知能検査との出会い

一ではまた、不二郎先生から、WAIS と WISC についてお話をうかがいます。先生は、インドネシアから復員されて、玉川大学の予科の教授になられたんですね。その後、玉川大学助教授になられ、ミネソタ大学に留学されて、デルプ (Delp) 教授に師事された。あちらで WISC や WAIS を学ばれたんでしょうか。

不二郎：デルプ先生が、教育相談センター長をしまして、親がやってきては教育相談を受けている場面を、私はしょっちゅう行って見てたんです。最後の学期に、先生のところで講義があるっていうんで、出ました。先生が、出来たばかりの WISC を「私の講義を今から聞く人は、20 ドルかかるけれども、WISC の用具を買いなさい」と。聴講していた学生 40 名ぐらいが 1 人ずつ買って、WISC を実際に使って講義を一学期間されました。当時は、生活費は月に 120 ドル程度。最初に (ガリオア奨学金で) 行った長島君は 75 ドルだった (ので、WISC はたいへん高いものでした)。

一1949 年にウェクスラーが WISC を発表して、品川先生が留学されたのが 1950 年で留学から戻られたのが 1951 年¹⁶ですから、本当に発表された直後に講義があったのですね。ウェクスラーとデルプ教授は、何か交流があったんでしょうか。

不二郎：いや、そういうことは、どの程度あったか分かりませんね。

一では、ウェクスラーが発表したのをデルプ教授がテスト会社なり、出版社から入手されて、それをすぐに講義をなさって。

不二郎：そうです。もう一般に売られてたんです。だから私もそれを買ったわけです。学生全員が買って、それで実際にやって見せてこうやって採点するんだって、一学期間で、丁寧な先生ですね、先生が出たばかりの WISC を一生懸命勉強したんですね。それで、私たちに、自分が勉強した通りに、私たちに教えるわけです。それで WISC を覚えたんです。徹底的に一学期使って。

一先生も実際に、被検者を使ってテストをなさったんでしょうか。

不二郎：被検者も使ったりしました。被検者は何処にでもあります。大学の中には、相談室だとか、い

¹⁶ 品川氏の留学期間については、東京フルブライト・アソシエーション／フルブライト記念財団に問い合わせた。品川氏は 1950 年のガリオア留学生で、留学期間は 1950.7.12 ～1951.7.18。ガリオア留学は、現在のフルブライト留学の前身にあたるもので、1949 (昭和 24) 年～1951 (昭和 26) 年まで実施された。

ろんなのがありまして。アメリカの大学ってオープンなんです。誰でも来れる。だから、外に、学校に行けば、何処でもやらせてくれるし。アメリカ人ってオープンで全然警戒心がないですから。

—アメリカでは WISC を何人くらいに実施なさいました？

不二郎：アメリカでやったのは、もう帰る前ですから、そう沢山はやってないと思います。主として、帰ってから日本で。これが（1939 年出版の WAIS 原書）、私、最初に手に入れた…マニュアルです。それで、日本版を作りました。まあ、この本なんかは、隅から隅まで何べん読んだか分かりません。これ、ウェクスラーの大人の、一番最初に出たもので、後で WISC、児童版が出るんです。これは、私は訳してはいません。ウェクスラーの検査っていうのは、IQ が 1 人の子どもに 3 つ出るんです。言語性と動作性と全体でしょ。で、1 人の人間に 3 種類の IQ が出る。言語的思考というのは、脳の左側で、動作性は右側で働きます。

—1953 年発表の日本版 WISC ですが、2 年くらい標準化に時間がかかりましたと書かれていますが。

不二郎：もっとかかってますよ。

—どのような経緯で日本改訂版を出すことになったかを教えてもらってもよろしいでしょうか。

不二郎：日本に帰国する前に、児玉先生がアメリカに視察で訪ねてこられたんです。私の下宿に先生が 1 週間泊まって。それで、実は、私はウェクスラーの知能検査日本版を作るつもりで、もう作る決心でいるって言ったんです。そしたら、児玉先生が「そりゃあいいことだ。僕もやりたい」って。「じゃあ一緒にやりましょう」って。それで、一緒にやることに、話を決めて、帰ってから一緒にやったわけです。この日本版を作るためには、非常に手続がやかましいんです。サイコロジカルコーポレーション¹⁷で手続きをして、（サイコロジカルコーポレーションが）厳正に調べて、OK が出ないと翻訳はできない。だから、翻訳するって言ったって、そう簡単には行かないんです。児玉先生は、わざわざミネソタまで帰ってきたなり、またニューヨークまで行って（ベルビュー病院の）彼（ウェクスラー）に会いに行つて。私はね、彼（ウェクスラー）に会っていないんですよ。もう、（日本に）帰る日が迫つて、会っていないんです。丸 1 年で返ってきました。

—すると、児玉先生がアメリカに訪ねていらっしゃったのは、1951 年の 5 月か 6 月ぐらいでしょうか。

不二郎：そうですね。版權はすぐには取れないんですけど、サイコロジカルコーポレーションというところを通さないと、ダメなんです。

—サイコロジカルコーポレーションはどのような機関でしょうか。

不二郎：サイコロジカルコーポレーションは、翻訳とかの業務を統括してるシステムですね。そして、そこを通さなければ翻訳することができないんです。

ウェクスラー知能検査日本標準化の作業

—先生は、ミネソタ大学から帰国されてすぐに、児玉先生と WISC の改訂の仕事に着手された。

不二郎：私が帰国してみたら、田中先生は定年で、教室の主要研究員をつれて、玉川大学長となられ、

¹⁷ Psychological Corporation。現在の Harcourt Educational Measurement。1921 年、心理学者 J.M.Cattell によってニューヨークに設立された心理検査関連を販売する会社。設立には、R.S.Woodworth と E.L.Thorndike もかかわっていた。1939 年に、Woodworth に師事した D.Wechsler が開発したウェクスラーベルビュー知能検査を発売。

心理学の研究所なども作り、私は助教授に任命され、活躍しました。住宅があつて戦災を受けないので落ち着きましたが、研究その他、都心の人たちとの関係が大変でした。たとえば児玉先生とはじめて WISC の日本版もたいへんでした。そこで「日本文化科学社」の好意で、上野の近くにテストの出版と研究のできるところに引越し、「田中教育研究所」が新しく発足して、児玉先生との協同の WISC 標準化が本格的になりました。最初の被検者は 170 名でしたが、日本女子大の児玉先生のお弟子さん方の助けで仕事がすすみました。

—WISC を作るときに、品川先生と児玉先生との間で役割分担のようなものはありましたか。

不二郎：ええ。役割は半分ずつに分けて、問題を作って、今度は 2 人で両方を検討して、「これはこうした方がいい、ああした方がいい」って。これに時間がかかりました。児玉先生と 2 人きりでやったんです。

—WISC を作るとき、先生は、テストの 1 人として、テストの実施もされたんでしょうか。

不二郎：私は忙しくて。どんどんテストがデータを持ってくるでしょ。それを整理して、統計取ったり、マニュアルを作らなきゃなんないですから。私自身はだから、テストはやってる暇がない。だけど、テストについては年中相談があつて、どうしたらいいとか、何歳の子どもをやったらいいとか。そういう計画全体を、私はやっていなきゃいけないわけで。

—児玉先生と品川先生は、翻訳作業や機具のしつらえをされていて、実際にテストを標準化するために取ったのは日本女子大の卒論を書く学生たちだったんですね。

孝子：そうだったんです。

—次に、WAIS のお話を伺いたいのですが、1958 年に、WAIS 日本版が出版されましたが、これも WISC と同じように、田中教育研究所と日本女子大の学生たちとで、標準化の作業を進めたのでしょうか。

不二郎：そうなんです。児玉先生が、そういうこと（テストの実施）は全部やったださつて。

—WAIS のマニュアルには、適切な被検者がいなかったのので、職業安定所まで行って、朝の 8 時に仕事にあぶれた人を見つけてテストをしたという苦労話を書いてあったのですが、それは、日本女子大の学生さんがなさったんでしょうか。

不二郎：そうです。大人は、ケースを探すのが大変だったんです。知らない人だと、何されるかわかんない。誰彼を通して紹介されて頼まないといけない。子どもだと「おいで」って言えば来ますし、学校の先生に頼めば集めてもらえるでしょ。でも大人は苦労しましたよ。仕事はあるし、別にお礼するわけでもないし。

孝子：うっかりどっかに頼みますと偏っちゃうでしょ。刑務所なんかですと協力してくれますけど。

—大人の被検者は、ボランティアでやったださる方を集めていらしたんですか。

不二郎：ボランティアでやってもらうわけでしょ。一か所の会社に頼んで偏ったのでは、具合が悪いですからね。だからなるべく広く、いろんな分野、いろんな職業の人を探さなきゃならない。これで、苦労したんです。被検者を探すのに。

孝子：どっちかと言いますと、インテリはしたくないとおっしゃる。

不二郎：一番苦労しました。最後に、慶應にいた印東太郎¹⁸さんは、WAIS の問題作りとか、統計

¹⁸ 印東太郎（1923-）1945（昭和 20）年、慶應義塾大学文学部哲学科心理学専攻卒業後、戦後第一

は途中までやって、アメリカに呼ばれて行っちゃったんです。

—WAIS の後には WISC-R 日本改訂版が 1978 年に出版されましたね。今度は標準化の協力者の人数が増えていて、多くの人が実験協力者として名前が挙がっていますね。

孝子：この本にあるものは（被検者の所属する）学校ですね。

不二郎：各県の教育委員会に頼んで、手配したんです。だから、私ども直接は、分かりません。間接的です。児玉先生と学生さん、教育研究所だけでは、結局、人数が足りなかったんでしょうね。

孝子：いきなり教育委員会へ頼んだと思いますね。

—WISC-R の後に、WAIS-R が 1990 年に出版されましたね。WAIS-R の本語版の序には、児玉省先生と茂木¹⁹先生が途中で他界したと書かれているんですけども。

不二郎：茂木先生がもう今死ぬっていう直前に、私、病院に見舞いに行きましたら、喜んでくれました。児玉先生はもう、お歳が 90 幾つで、自然と、亡くなりました。

—筑波大学の小林重雄先生、藤田和弘先生たちはどのようないきさつで参加されることになったのですか²⁰。

不二郎：この人たちは、私どもが直接の知り合いではなくて、会社の方で見つけてきた人でした。

—会社というと、田中研究所ですか？適性研究所の方ですか？

孝子：ふーん。全然知りませんね。後から、私どもの直接知り合いでない人たちの方へ仕事に移っていったんです。

不二郎：会社が研究者を頼んで、やった、その研究者の人たちですね。多分。

—サイコロジカルコーポレーションと連絡を取るのは、児玉先生から会社の方に移ったんでしょうか。

不二郎：いや。サイコロジカルコーポレーションと私が申ししたのは、アメリカにある、システムなんです。ですから、日本とは直接の関係はないんです。そこを通してからでないと翻訳はできないという、そういう役所なんです。結局、いい加減なものを訳されちゃ困るから、そこが監督をしてる、そういう機関ですね。役所じゃないんですけど、そういう権力を持ってるんです。だから、そこで許可にならないと、翻訳は許可にならない。サイコロジカルコーポレーションというのは、サイコロジストとしては優秀な人たちを集めて、組織している、組織なんです。サイコロジカルコーポレーションには、私は実際に行ったことはありません。行かなくて、（翻訳許可が）できるようなシステムになってる。

—先生はアメリカでターマン (Terman) ²¹に会われたとうかがいましたが。

回アメリカ視察団として渡米。1947（昭和 22）年、慶應義塾大学講師、助教授を経て 1961（昭和 36）年、同大学教授。1980（昭和 55）年より米国カリフォルニア大学アーバイン校教授。専門は心理測定、数理心理学。（大泉、2003）

¹⁹ 茂木茂八(1910-1989) 1932（昭和 7）年、東京高等師範学校付設第一臨時教員養成所卒。東京府立第七高等女学校教諭等を経て、1948（昭和 23）年、日本文化科学社田中教育研究所の設立に参画し専務となる。後に日本心理適性研究所所長。専門は教育心理学、知能検査。（大泉、2003）

²⁰ 品川不二郎とともに、小林重雄、藤田和弘、前川久男が WAIS-R 日本語版著者序の筆者となっている。

²¹ Terman Lewis(1766-1956) スタンフォード大学心理学教授。1916 年にビネ・シモン式知能検査の大規模標準化を行い、「スタンフォード・ビネー改訂増補ビネー・シモン知能測定尺度」を開発した。

不二郎：はい。会いました。非常に簡単な話なんですがね。アメリカへ行ってすぐ、スタンフォード大学へ私を案内してくれた人がいまして、スタンフォード大学へ行きましたら、夏休み中だったので、大学は閉鎖みたいな感じだったんです。研究室はこういう形で、長い建物、ちょっと滑稽ですね。内側から廊下で、外側が研究室という。珍しい建物だっというので見て回ってた。夏休み中ですから、誰もいないんです、人が。それで、1つだけ電気のついている部屋があったんです。部屋の前に名札があって、ターマンって書いてあった。それで私、「これはターマンじゃないか」と思っ、ノックしたんです。ノックしたら「Come in」って言われて、間違いなくターマン、彼そのものだった。30分くらい時間を割いてくれて、話し込んで。「日本にも実は、その、Japanese Terman という psychologist がいるんですよ」って、「それは Mr. 田中寛一先生のことだ」と話したりとか、いろんな話をして。写真が残ってるんですが、物置かどっかに紛れ込んでちゃってて。その時、彼の年齢が、72歳でもう相当な、だから、名誉教授ですよ。ちゃんと一室与えられて。彼1人だけ。他の人は夏休みでみんな誰もいない。やっぱり、ファイトがあるというか気力があるという。そして、私どもが行ったもんだから非常に喜んでくれました。

一品川先生は、昭和46年に、「知能テスト有害論に答える」²²という文章を発表されています。

不二郎：テスト攻撃、知能テスト攻撃じゃありませんが、教職員のそんな運動があったでしょ？教職員組合だったと思います。日教組みたいな、団体があって、一時攻撃したことがあったんで、それで私が反論を書いた。

一先生が直接攻撃されたことはあったんですか？

不二郎：私個人が攻撃されたということはないです。ただ、テストがダメだとか知能テストはけしからんみたいな、ほんと一時そういう時がありましたけど。その前は逆で。（その後）全然そういうことは言わなくなりましたね。むしろ、先生たちがテストをやるようになった。

一先生は色々と知能テストを作られましたけど、限界のようなものはお考えになりましたか。

不二郎：知能テストの限界、ありだと思ってます。知的な面の一部部分を測る道具と私は考えています。だから、あくまで道具の1つですから。教育相談をするときには、私は必ず WISC をやるようにしてますけど、それは資料の1つ。色々相談して、検査の結果と比べたものを書いたものがありますが、面白いですね。パーソナリティと、性格と関係が非常にあるんです。それで、私の学位論文は、知能とパーソナリティとの関係のことを書いたんですが、こういう性格のグループ、こういう性格のグループっていうのを、本に書いたんですけど、知能というのは、知能だけが独立してるものじゃなくて、性格とか経験とか体験とか、そういうものと非常に結びついてるということ、私は言いたいわけなんです。だから、この検査をやりますと、かなりそういうことが、この検査の結果を見ただけでもかなり分かりますね。それから、例えば、いろんな病的なというか、グループを集めてみると、ちょっと独特な共通点が出てくるとか。だから、やっぱり知能というのは、心というか、パーソナリティというか、そういう性格的なものと無関係ではないという、そういう学位論文を書きました。

—ありがとうございます。それぞれの先生方から、「知能観」をお伺いします。「知能観について」

²² 品川不二郎（1975）知能テスト有害論に答える（岡堂哲雄編（1975）現代のエスプリ 97 知能, pp.105-111）

と、あと『心』というのは一体どういうものと考えていらっしゃるのか」。

不二郎：心というと、これは心理学的な用語ではないんですね。ところが、知能というふうな言葉になってくると、知能検査とか、そういうものと非常に、狭い意味の心の、心っていうのは、情緒的なものとか色々、非常に広いでしょ、心というのは。それで、知能となると、知的な心の中で、知的な働きを知能と呼ぶわけですね。それだけです。それだけの違いで、心の働きの中の、1つだと思えますけどね。知能は知能として、なんか独立してるみたいな地位を持っていますね。そして、知的な働きということになりますから。知的、心の中の知的な働き、だから、学力にも使われるし、いろんな政治的な、面談だって使われるし、もう何にだって使われますからね。

—漠然とした質問で、失礼いたしました。さて、孝子先生はいかがでしょう。知能についてどんなふうに考えていらっしゃいますか。

孝子：私は知能というのは、非常に、生理的な、遺伝的な要素が強いと思いますね。その知能と実際に使われてる、現場で、実際に生活の中で使われている知能というのは、ちょっと違うのではないかな。で、それはそこにその人の生活の体験みたいなものが絡んでいるんじゃないかなと思うの。だから、知能は非常に高いのに、活動、実際の生活では、それが生かされていないという、そういう、私の場合は大人ではなく子どもを見てきましたから、そういう子ども。そうすると、知能の方とは、遺伝的な、生理的な要素が非常に強い。だけど、実際働いている知能というのは、その子どもが体験し、色々考えたそういうものが生かされていく二重構造みたいなのが感じますね。それから、WISC なんかを知るようになりましたから。特にそう思うんですけど、言語的な、いわゆる verbal の方は得意な子、それから、non-verbal の方が得意な子。これは、非常に違いますからね。で、一般に知的な仕事をしている人っていうのは、verbal が高い人が有利かなということを感じますね。だから、その動作性の方が高い子どもというのは余程大人が注意してやらないと、気づかれないで、生かされないでいくような場合もありますね。それから、さっきも言いましたが、政治家なんてのは、色々そういう面が、言語性の方も、動作性の方もよくバランスが取れてるような、そういう人がなったらいいのにね。そういう職業、他にも色々あるでしょうけどね。そんなことを感じますね。

—「心」というものについて

孝子：心というのはね、その子どもが体験したもので、形作られていくような感じがします。それは、私はですね、一卵性の双生児を持ってるわけ。この2人の子どもは非常に性格的に違います。ということは、生理的なものより、彼女自身が社会とどう触れたか、それが大きくなっていく感じを、これは実感として持っていますね。心は子どもが、自分が、こうその環境の中で、育てていくっていうか、育んでいくと、そういう感じがしますね。だから、親が子どもに色々なことをしてやるといっても、その子が何をその中から取り込んでいくか、子どもによって大変違う。うちの2人の子ども性格的には極めて違います。なぜ違うか。それは分かりませんね。彼女たちが選びとった、それを取り込んで行ったんだなって、思うんですよね。だから、その人が人生とどう触れたかによって、違ってというか、育っていくと。そういう感じがしますね。

不二郎：宗教的なものとか色々ありますでしょ。私どもは、無宗教ですから。外国へ行くと、無宗教って言ったら、パスポートコントロールで変な顔されますから、一応、仏教徒ということにして通りますね。でも、そういうのも一切ないから、子どもたちにもそういう影響を与えていないと思いますね。ただ、うちではですね、午後10時がお茶の時間。それから12時くらいまで勝手にお喋り

をします。でその中で、子どもがそれぞれ、何を選んで行ったのか、考えて行ったのか、そんな体験をしてましたね。それが高校生から、大学生くらいまでですね。だから、うちの門限は10時。10時になったらお茶の時間。で、一番困ったのこの人です。なかなか10時に帰ってこない。我が家ではたった1人の男性ですから、よっぽど頑張らないと（笑）、いけませんでしたね。気の毒です。その一卵性の双生児を育ててみて、いろんなことを考えましたね。
—本日は長時間にわたってのご協力、ありがとうございました。

おわりに

本研究では、WAIS、WISC、WAIS-Rの日本改訂版を出版した心理学者である品川不二郎と、夫人の教育評論家である品川孝子に行ったインタビューを報告した。インタビューでは、品川不二郎・孝子両者の経歴、特にジャワでの体験が語られた上で、WISC、WAIS、WAIS-Rの日本語改訂版出版の経緯、アメリカでのターマンとの出会い、知能観や心についての捉え方が語られた。以上のインタビューを概観すると、日本におけるウェクスラー式知能検査の導入と発展に関して、次の特徴が浮かび上がってくる。

第一に、ウェクスラー式知能検査が留学による成果物であったことである。インタビューの中で品川不二郎は、WISCとの出会いについて、アメリカ留学時の指導者であったデルプ教授「WISCを実際に使って講義を一学期間されました。」と述べている。そして、アメリカを訪れた児玉省に対して「それで、実は、私はウェクスラーの知能検査日本版を作るつもりで、もう作る決心でいるって言ったんです。」と述べている。この発言からは、品川が留学先で知能検査を偶然に学んだことが、ウェクスラー式知能検査の本邦改訂版発表の契機となったことがうかがえる。

Takasuna(2012)は、日本の心理学史を概観する中で、第二次世界大戦後の交換留学生が持ち帰ったアメリカ心理学の最新理論が、現代の日本における心理学の発展の土台となったと考察した。留学により日本にもたらされた理論として、新行動主義(takasuna,2012)やロジャースのカウンセリング理論(小泉・泉野・高柳、2004)が報告されてきたが、品川のインタビューからは、ウェクスラー式知能検査も、留学がもたらした成果の一つと位置付けることが出来る。

第二に、知能検査の改訂に伴い作業が組織化されたことである。一般的に、外国で開発された心理検査を使用する際には、標準化の作業を行うのが一般的である。WISCの標準化に関して品川は、「最初の被検者は170名でしたが、日本女子大の児玉先生のお弟子さん方の助けで仕事がすすみました。」と発言している。この発言からは、WISCの日本改訂版作成の際には大学生がテスターとして作業を補助していたことが分かる。また、『WAIS 成人知能診断検査法』には、被検者を集めるために職業安定所に出向いた旨が書かれていることから、少人数の著者の身近な人材で標準化作業を行ったことが分かる。一方で、改訂版であるWISC-Rでは、被検者集めを「各県の教育委員会に頼んで、手配したんです。」と述べており、標準化作業協力者数も増えていることから、標準化に協力する人が大幅に増えたと考えられる。以上のことから、検査が版を重ねるのに従って、少人数による直接的な検査改訂作業から、組織的な検査改訂作業に発展したことがうかがえる。

第三に、知能検査改訂の主導者が出版社に変化したことがあげられる。品川は、WAIS-Rの共著者について、「この人たちは、私どもが直接の知り合いではなくて、会社の方で見つけてきた人でした。」「全然知りませんね。後から、私どもの直接知り合いでない人たちの方へ仕事に移ってったん

です。」と述べている。WISC や WAIS が、品川と直接交流がある児玉との共同作業から始まったのに対して、WAIS-R では出版社である日本文化科学社の介入により新たな著者が加えられている。一般的に、技術や製品が長く使用されるためには、人や世代を超えた継承と発展のシステムが必要とされる。これは知能検査でも同様であり、個人から出版社の元に主導権が移ったことで、現代まで続く継続的な改訂が可能となったと考えられる。

ウェクスラー式知能検査は、品川が留学で偶然に出会ったことから始まったが、少人数による直接的な改訂作業から組織的な作業へ、品川・児玉という個人主導から出版社主導の改訂作業へと変化したことで、50 年以上に亘る継承と発展が可能となったと考えられる。ウェクスラー式知能検査の導入者であった品川のインタビューは、個人から組織への継承の形の変化が知能検査の発展を支えたことを示唆している。

謝辞

品川不二郎先生、品川孝子先生には、長時間のインタビューにご協力をいただいた。深く感謝の意を表します。なお、品川不二郎先生、品川孝子先生ともにインタビュー後に永眠された。ご冥福を心よりお祈りいたします。

文献

学校法人山陽学園（2015）沿革＜<http://www.sanyogakuen.net/enkaku1.html>＞（2015 年 9 月 30 日）

芳賀登監修（1993）日本女性人名辞典，日本図書センター

石川衣紀・高橋智（2008）大阪市視学・鈴木治太郎と知能測定法標準化の実践：1920 年代を中心に，東京学芸大学紀要総合教育科学系，59，pp.363-378

児玉省・品川不二郎（1954）WISC 知能診断検査法，日本文化科学社

児玉省・品川不二郎・印東太郎（1958）WAIS 成人知能診断検査法，日本文化科学社

小泉晋一・泉野淳子・高柳信子（2004）日本における臨床心理学の導入と受容過程

http://www.ritsumeihuman.com/uploads/publications/97/9_35.pdf＜2015 年 9 月 29 日＞

Lichtenberger,E.,O. & Kaufman,A.,S.(2012) Essentials of WAIS-IV Assessment,Willy,

南博・依田新（1950）知能診断テストの手引：ウェクスラーベルビュー法改訂，金子書房

中村淳子・大川一郎（2003）田中ビネー知能検査開発の歴史，立命館人間科学研究，6，pp.93-111

塗師斌（1973）テストの標準化の方法（東洋・大山正・詫摩武俊・藤永保編（1973）心理用語の基礎知識，有斐閣，325）

大泉溥編（2003）日本心理学者事典，クレス出版

佐藤達哉・溝口元（編著）（1997）通史日本の心理学，北大路書房

Reisman,J.,M.（1976）A History of Clinical Psychology.（茨木俊夫訳（1982）臨床心理学の歴史 誠信書房）

Silva,M.,A.(2008) Development of the WAIS-III: A Brief Overview, History, and Description.

Graduate Journal of Counseling Psychology,1,pp.117-135

下中邦彦編（1985）大百科事典，平凡社

鈴木聡志，安齋順子，鈴木朋子（2011）品川不二郎氏に聞く：戦後の日本への臨床心理学の導入者
心理学史・心理学論 Vol.12/13 pp.1-12

鈴木朋子（2003）久保良英によるビネー式知能検査の改訂，心理学史・心理学論，5，pp.1-13

Takasuna, M. (2012) Japan. In Baker, D. B. (Ed.), The Oxford handbook of the history of
psychology: Global perspectives (pp.347-365). Oxford: Oxford University Press.

小学館（2001）日本大百科全書，小学館